

サーサナ

第61号 仏暦2566（西暦2023）年9月11日

自律・自立と慈悲（1）

すべてのものは暴力におびえ、すべてのものは死をおそれる。
己が身をひきくらべて、殺してはならぬ、殺させてはならぬ。

（ダンパマダ第129偈/中村元訳）

自己を島とし、自己を依り所として、他を依り所とせず、
法を島とし、法を依り所として、他を依り所とせずになさい。

（大般涅槃経第35節/片山一良訳）

前号で、「仏教は、苦の解決を目指す教えです」と書きました。四苦八苦というように、すべては苦であるのですが、その中でも最大の苦は殺し殺されることではないでしょうか。そうであるならば、私たち仏教徒は、すべての野蛮、暴力と殺害が絶えて見られぬ、そのような世界に至る道を歩むことが求められます。『ダンマパダ』第129偈の「殺してはならぬ」が意味するのは、私たち一人一人が、自身の決意と努力によって殺害のない世界を希求せよということです。そのためには、我が身と心を律し、コントロールする必要があります。（個人的レベルでの）暴力や殺害は、悪しき感情、たとえば怒り、憎しみ、恨みに起因します。自らを律するためには瞑想が有効で、座禅とか歩行瞑想、サマタ・ヴィツパサナ瞑想などがあります。

「殺さない」という、個人的レベルでのことならば瞑想は有効な方法ですが、「殺させない」ためには、それだけでは不十分です。「殺させる」というのは三つの要素から成り立ちます。すなわち、殺す者、殺される者、そして殺させる者、です。このことは、個人的なレベルを超えて社会的なレベルでのことがらとなります。というのは、「殺させる」というのは、「殺させる者」と

「殺す者」との関係、すなわち「殺すことを強いる者」と「殺すことを強いられる者」との関係において成り立つからです。そしてこの場合、たいていは、強いる者は強いられるものよりも立場が強いといえます。戦争がその典型です。上官が兵士に他国人を殺せと命じます。もし戦争が起きれば、上官の命令に背いて「殺さない」と言い切れる人はほとんどいないでしょう。ゆえに、「殺してはならない」という基本的で根本的な教えは、殺すことを命ずるような人間関係（支配-被支配の関係）とは真逆の関係にあり、社会のありようについていやがおうでも考えさせることになります。そこまで見据えた上でこのダンマパダの教えを受け止める必要があります。

ここにおいて重要性を増すのが、冒頭に引用した『大般涅槃経』です。これは、私たちに自律（他者からの支配や制約を受けずに、自分自身で立てた規範に従って行動すること）ないし自立（他者へ従属・依存することなく独り立ちすること）を教えています。この自律と自立は民主主義社会の基礎でもありません。「民主主義は最悪の政治形態である。ただし、過去の他のすべての政治形態を除いては」と言った人がいますが、民主主義は、もしも私たち一人一人に自律・自立の精神が根付いていなければ、容易に衆愚政治（多数派が正義であると単純に決めつけ、少数派を無視するような政治）に堕してしまう危険性もはらみます。自分の考え方・意見・行動を、単に多数に従ったり、あるいは慣例とか伝統とか権威とかなどに頼って、本当に正しいかを考えることなく決めてしまうのは、とても愚かで危険なことです。ここで「本当に正しい」とは、仏教的にいうならば「法」（インドの言葉ではダルマ、あるいはダンマ）ということになります。これは法律とか、保持されるもの、真実、教法という意味を持っています。

私たち一人一人が自立した個人として、いかなる束縛も命令も依存もなく、ただ己の良心の命ずるままに、同時に法に照らし合わせて己を律しつつ、考えて行動する。古い漢語訳仏典ではこれを「自灯明 法灯明」とも表現しています。（次号に続く）



永代経懇志お礼

下記の方から永代経懇志を頂戴いたしました。ここにあらためてお礼申し上げますと共に、今後とも法義相續されますことをお願いいたします。

6月20日	山田様[天白区野並]	20万円
8月6日	西川様[緑区亀ヶ洞]	10万円

法要行事について

各法要・行事に必要な勤行本は、お持ちでない場合は当寺より進呈または貸与いたします。念珠は必ずご持参ください。また肩衣の着用を推奨します。



九月 秋彼岸会

彼岸とは、覚りの世界＝涅槃のことです。浄土真宗では「阿弥陀仏の浄土」でもあります。真宗では伝統的に、人が亡くなることを「お浄土に還る」と言い習わしてきましたが、お彼岸は亡き人を偲ぶと同時に、亡き人のことばに耳を傾ける大切な期間でもあります。

- ❖日 時 9月21日（木）午後2時～4時
- ❖内 容 勤行（観無量寿経訓読、正信偈）、法話
- ❖持ち物 勤行本『真宗法要聖典』
- ❖法 話 当寺住職

十月 報恩講（ほうおんこう）

報恩講とは、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人（1173-1262）の祥月命日（11月28日）にあたって、その前後に勤められる法要です。親鸞聖人が亡くなられた日に仏法を聴く集いを開いて、自らの信仰を確かめ学び直そうという人たちが集まりました。この集いを「講」といいます。そして、和讃に「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし」とうたわれるように、仏祖への報恩謝徳の集いでもあります。

- ❖日 時 10月29日（日）午前10時～午後3時
- ❖内 容 午前：勤行（文類偈・念仏讃・回向）、御俗姓拝読、法話
午後：勤行（正信偈・念仏讃・回向）、法話
- ❖持ち物 勤行本『報恩講勤行テキスト』
- ❖法 話 前田和丸師（一心寺前住職）
- ❖記念品 法語カレンダー、教化施本ほか

おみがき奉仕

本堂の仏具を研磨します。汚れてもよい服装でおいでください。

- ❖10月22日（日）午前9時～11時（終了時間は多少前後します）
-

十二月 成道会（じょうどうえ）

約2500年前、北インドでお釈迦様がさとりを開かれ仏陀とされました。12月8日、35歳のときであったと伝えられています。お釈迦様のさとりから仏教は始まりました。私たち仏教徒にとって最も神聖な記念日です。

- ❖日 時 12月8日（金）午後1時～2時半【午後0時半から受付】
- ❖内 容 勤行（和文仏教聖典読誦・正信偈同朋奉讃）・法話
- ❖持ち物 『和文仏教聖典』『正信偈同朋奉讃』（または『真宗大谷派勤行集』）
- ❖法 話 当寺住職

十二月 門徒総会

上記の法要に引き続き、門徒総会を開催します。年間の活動報告をし、皆様からのご意見をうかがいます。

教心寺ライブラリーから（9）

エラスムス『平和の訴え』

（岩波文庫、1961年）

キリスト教に基づく平和論。エラスムスの生きた時代（1500年頃）、近代国家が成立し始める頃のヨーロッパ政界事情が本書の成立を促したそうです。当時の時代背景への理解は大切なのですが、それにもかかわらず、本書の普遍的価値は、今日においてこそますます輝きを増しています。現在のロシア・ウクライナ戦争に関わって、ロシア正教の総主教がロシア軍の侵略を祝福していることを思い合わせると、なかなか示唆に富んだ名言を多く見いだすことができます。「戦争はひとたび始まってしまえば容易なことでは終わらない」「聖職者たるもの、一致して戦争反対の声をあげなくてはならない」など。本書は単なる理想論を述べているのではなく、極めて現実的な観察から生まれています。現代の政治家や宗教者こそエラスムスを読むべきです。

真宗大谷派 教心寺（名古屋教区第30組）

編集発行人 釋眞弍（山口眞一）

468-0026 名古屋市天白区土原3丁目205番地

電話：801-1381 F A X：807-1198 電子メール：kyosin@nagoya30.net

URL <http://www.nagoya30.net/temple/kyosin/>
